

二〇二二年度 倉敷芸術科学大学 一般選抜

前期 A

〔国語〕

一、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

歴史上には、その人がいたことで大勢の人命が助かった、ということがある。先の東日本大震災でも、それがおきた。他の自治体に比べて、格段に死者・行方不明者の少なかった村がある。

普代村(岩手県)。三陸海岸にある人口三〇〇〇人のこの村は一八九六年の明治三陸大津波では三〇二人、一九三三年の昭和八年三陸大津波でも一三七人が犠牲になった(『広報ふだい』No.六一〇)。二〇一一年の震災でも二〇メートルを超える巨大津波が向かってきた。(A)、この村では、海へ船を見にいった一人の方が気の毒にも(U)になってしまったが、奇跡的に死者はゼロであった。

いや奇跡ではなかった。震災時にはとくに故人となっていたが、この村にはかつて和村幸得という村長さんがいた。この人の尽力で犠牲者が少なかったといわれる。ただ、和村の記録は少ない。東京まで行けば、国会図書館に一冊だけ、彼の回想録『貧乏との戦い四十年』がシユウゾウされている。震災の犠牲を減らす人物の生涯とは、どのようなものをぜひ知りたいと思ひ、浜松から新幹線に乗ってこの本を読みに行ってきたので、記していきたい。

和村は明治の大津波の被害を聞いて育ち、昭和八年大津波のサンジョウを目の当たりにした経験があった。「絶対に、村民を守らねば」と思っていた。「村民のなかにも防波堤設置を求める声」が上がっていたので、津波から村を守る防波堤の建設を決意した。国と岩手県の間をホンソウし、たびたび上京して(V)の政治家・鈴木善幸(のち首相)を説いて建設省にチンジョウし、みずから「津波研究所」にも行き、いろいろの試験模様を見せられながら勉強した」。

県費による着工を勝ち得た和村は、県の土木部にみずから乗り込んだ。(B)佐々木という非常に熱心な技師がいて、和村は、この人にひつついて防波堤の設計をすすめた。現今のごとく海岸一律にはなく、津波の力に逆らわぬ堤を効果的な場所に造った。自治体の首長が、津波や土木の研究機関に直接乗り込み、熱意をもって、技師と一緒に考えて対策にあたっているところが、今の政治家に多い「人任せの(W)」とはまったく違う。

(C)、村の人口が増え、防波堤の外側にも人家が建てられるようになったのをみて、和村は(X)などとは思わなかった。新たな津波対策が必要と考え、水門の建設を計画した。

和村が妥協しなかったのは水門や防波堤の高さだ。「なぜそんな巨大なものが要るのか」という周囲の大反対を押し切って、一五・五メートルの高さにこだわったことは、震災後、テレビ報道もされたから、今日よく知られている。

昭和八年大津波のとき和村は地獄をみた。「親父を呼ぶ声、母親を呼ぶ声。(Y)とはこのことか、実に悲しい限りであった」。「密集地帯の家屋は一軒も残っておらず、山の中腹にある墓の前に死体が累々と並べられ(中略)タイセキした土砂の中から死体を掘り起こしているところを見た時には、(D)申し上げてよいか、言葉も出なかった」(『貧乏との戦い四十年』)。

(E)和村は「二度あったことは、三度あってはならない」(二〇一三年に建ったケンショウ碑の碑文)と、村の一等地の畑をつぶし、土地収用に訴えざるをえなくなっても、水門・防波堤の高さでは妥協しなかった。

震災後、(Z)の墓前には花と線香の煙が絶えない、ときいた。

(磯田道史『天災から日本史を読みなおす』による)

問一、波傍線部a～fのカタカナを漢字に改めよ。

問二、(A) (E)に入る最も適切な語を次の中から選び、記号で記せ。

ア そこに イ それで ウ また エ 何と オ もちろん カ ところが

問三、(U) (Y)に入る最も適切な語をそれぞれの語群から選び、記号で記せ。

(U) ア 諸行無常	イ 四苦八苦	ウ 行方不明
(V) ア 地元選出	イ 地元進出	ウ 地元出身
(W) ア 土木事業	イ 公共事業	ウ 慈善事業
(X) ア 自己判断	イ 自己研鑽	ウ 自己責任
(Y) ア 阿鼻叫喚	イ 艱難辛苦	ウ 臥薪嘗胆

問四、傍線部1「奇跡ではなかった」と筆者が考える要因を本文に基づいて、記せ。

問五、傍線部2「新たな津波対策」について、(あ)「新たな津波対策」とは何か、(い)「新たな津波対策」の前の対策は何か、それぞれ本文の語句を用いて五字で記せ。

問六、傍線部3「そんな巨大なものが要るのか」と反対する理由として、考えられるものを二つ記し、簡潔に説明せよ。

問七、(Z)に入る最も適切な語を本文から選び、漢字二字で記せ。

二、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

詩はまったく楽に、次から次へ、すらすらと出来た。学習院の校名入りの三十頁の雑記帳はすぐ尽きた。どうして詩がこんなに日に二つも三つもできるのだろうと少年は訝かった。一週間病気で寝ていたとき、少年は「一週間詩集」というのを編んだ。ノオトの表紙を楕円形に切り抜いて、第一頁の Poésies という字が見えるようにしてある。その下には今度は英語で、12th. → 18th. MAY 1940 と書いてある。

彼の詩は学校の先輩たちのあいだで評判になっていた。『嘘なんだ』と彼は思っていた。『僕が十五歳だというんで、みんながさわいでくれるにすぎないんだ』

少年はしかし自分のことを天才だと確信していた。(A)、先輩にうんと生意気な口をきいた。「僕は……だと思えます」なんて言い方はよそうと思っていた。何事につけても、「それは……なんです」と言うように気をつけねばならぬ。

彼は自瀆過多のために貧血症にかかっていた。が、まだ自分の醜さは気にならなかった。詩はこういう生理的ないやな感覚とは別物である。詩はあらゆるものと別物である。彼は微妙な嘘をついていた。詩によって、微妙な嘘のつき方をおぼえた。言葉さえ美しくればよいのだ。そうして、毎日、辞書を丹念に読んだ。(中略)

詩というものが、彼の時折の幸福を保証するために現われるのか、(B)、詩が生れるから、彼が幸福になれるのか、そのへんははっきりわからなかった。ただその幸福は、久しくほしいと思っていたものを買ってもらったり、親につれられて旅行に出かけたりする幸福とは明らかにちがっていて、多分誰にも彼にもあるという幸福ではなく、彼だけの知っているものだということは確かであった。(中略)

言葉の本当に個性的な使い方を、彼はまだものにしていただけではなかった。しかし彼が辞書の中からみつけ出した多くの言葉は、それが普遍的な言葉であればあるほど、意味も多様な内容も多岐であって、それだけ個性的な個人の独自の使用法を持っているという風に考えられた。この独自の使用法が、体験によってはじめて作り出され色づけされるとは、必ずしも考えなかったけれども。

われわれの内的世界と言葉との最初の出会は、まったく個性的なものが普遍的なものに触れることでもあり、また普遍的なものによって錬磨されて個性的なものをはじめて所を得ることでもある。この言いがたい内的経験は、十五歳の少年のなかにも、十分に累積されていた。(C) 彼が一つの新しい言葉にぶつかって感じる違和感は、同時に、彼の裡に未知の一つの感情を体験させることだったから。それはまた彼が、年に似合わぬ平静を表むき保つことにも役立った。或る感情に襲われると、その感情が心に惹き起す違和感から、ただちに前に述べた違和感のうちの適当なものを思い出し、それを惹き起した言葉を思い出し、その言葉によって目前の感情にあっさり名前をつけ、処理してしまうことに慣れたから。こんなわけで、少年は「絶望」も「呪咀」も「得恋の喜び」も「失恋の嘆き」も「苦惱」も「屈辱」も、あらゆるものを知っていたのである。

それを想像力と名附けることは易しかった。しかし少年はそう名附けることを躊躇した。想像力というからには、他人の痛みを想像して自分が痛み出すような感情移入がなければならぬ。少年の冷たさは、他人の痛みを決して感じなかった。少しも自分は痛まずに、『あれが苦痛というものだ。僕はちゃんと知っている』と眩くだけであった。

(三島由紀夫「詩を書く少年」による)

問一、波傍線部 a～e の読みを、ひらがなで記せ。

問二、(A) (B) (C) に入る最も適切な語を次の中から選び、記号で記せ。

A なぜなら B それとも C ウ だから D エ けれども

問三、傍線部 1 「僕は……だと思えます」の点線部にあてはまる語句を、本文から選び記せ。

問四、傍線部 2 「それは……なんです」の点線部にあてはまる語句を、本文から選び記せ。

問五、傍線部 3 「詩はこういう生理的ないやな感覚とは別物である。詩はあらゆるものと別物である」とはどういうことか。あなたの思うところを記せ。

問六、傍線部 4 「この言いがたい内的経験」を、本文では他の表現でどのように述べているか。本文から抜き出し 100 字以内(句読点は一字に数える)で記せ。

二〇三二年度 倉敷芸術科学大学 一般選抜

〔 前期 A 国語 〕

問七	問六		問五	問四			問三	問二	問一
	②	①	あ				U	A	a
									b
							V	B	
			い						c
							W	C	
									d
							X	D	
									e
							Y	E	
									f

一、

二、

問六				問五	問四	問三	問二	問一
							A	a
							B	b
							C	c
								d
								e

┃

受験地	受験番号	得点欄
		※

※は記入しないこと